

ACTIVE APPROACH!

STUDENT ACTION 学生環境改善活動 学生たち自ら作成の「学生環境マネジメントマニュアル」が完成

「学生環境方針」に続いて「学生環境マネジメントマニュアル」が完成。さらに、学生の核となって環境保全活動を推進する学生環境推進委員会も新たなメンバーに引き継がれました。新委員に、本格始動し始めた学生環境保全活動への抱負や今後の課題などを、旧委員をオブザーバーに迎えて座談会形式で大いに語ってもらいました。その模様を要約したものです。

線路が敷けて、今やっと走れる状態。

座談会は、四釜正明・前委員長（建築学科4年生／米沢工業高校）からバトンを受け取った森下泰康・新委員長（建築学科3年生／東工大付属高校）の司会が始めました。「前々委員長の佐藤さんや前委員長の四釜さんなどを中心とした旧委員会の諸先輩が線路を敷き、今やっと走っている状態になったと思います」との森下・新委員長の挨拶があり、より多くの一般学生の活動への参加を促すにはどうしたらよいかというテーマで話が進みました。

委員会の存在をもっと知ってもらおう。

冒頭では、「一般学生には、委員会の認知度さえまだ低いのが現状です。

まずもっと知ってもらうことが重要では」との提言があり、座談会の流れはその方向に。「大学の掲示板に写真や写真を多用した目立つ委員会のポスターをどんだん貼った方がいい」、「委員会独自のイベントを開催したら」、「委員会のパンフレットを作成して学生に配ろう」、「新入生のオリエンテーションで大々的に宣伝してもらう」などの意見が出ました。

一般学生に見える形で活動とその報告を執行しよう。

さらに、ISO14001を取得したことは知っているが、どんな活動をしているかわからない学生が意外に多いという発言も。それには、具体的な活動やその報告を積極的にやるべきだと

の意見の集約を見ました。具体例として「サービスセンターの廃油を使った石鹸づくりをデモンストレーションで行おう」、「大学とリンクしたホームページを作成して活動報告を行い、大学のパソコンの授業でアクセスしてもらう」などのグッドアイデアが湧出。決して簡単に解決するものではないが、一般の学生に見える形で活動を起こせば、活動や存在は知ってもらえるとの意見が大多数でした。

プログラムは既にあり、あとは行動あるのみ。

「取り組みのプログラムは既に出来ているのだから、あとは実行してみよう。そして、環境マネジメントシステムのプラン、ドロー、チェック、アクションのサイクルを徹底させることが大切。他大学でもISO14001を取得しようとする動きがあるので、他校との交流を図ることも計画内です」との森下・新委員長の締め言葉で、座談会を終了しました。この言葉で、座談会を終了しました。この言葉で、座談会を終了しました。

ROUND-TABLE TALK 学生環境推進委員会・座談会 学生環境保全活動への建設的意見が続出!!

学生環境推進委員会の皆さん									
川本 祐一 3C 総務	※ 宮城 雅也 1E 庶務局長	山本 勝也 2E 撮影局長	久保田 拓哉 4A 会計局長	廣田 朝昭 4A 副会長					
※ 森下 泰康 3A 委員長	※ 佐藤 弘康 1C 編集局長	※ 学生生活向上委員長	上塚 慶大 3C 企画編集局長	荒井 伸之 4M 財務局長					
※ 菅野 勇輝 3S 会計局長	※ 堀友 和 1A 渉外局長	※ 小山 剛 3C 委員長	※ 文芸部委員長	※ 理 義 3A 委員長					
※ 後藤 勇輝 2S 渉外局長	※ 小野 晋太郎 2C 広報局長	※ 小田 久 4E 会長	※ 小田 豪太郎 3A 編集	※ 体育実習委員長					
※ 前川 智行 2S 渉外局長	※ 佐藤 真太郎 3A 委員長	※ 西山 純子 3A 委員長	※ 学生環境推進委員会	※ 上田 浩之 4M 副委員長					
※ 文化団体連合会	※ 菅 義 3A 副委員長	※ 江崎 雅也 3A 委員	※ 菅 義 3A 副委員長	※ 道野 巧 4M 副委員長					
※ 渡邊 勝郎 3C 会長	※ 田中 淳一 2E 委員長	※ 野澤 直樹 2C 会計局長	※ 中央執行委員会	※ 卒業アルム委員会					
※ 藤原 真一 3C 副会長	※ 岡久津 丈二 2M 副委員長	※ 卒業アルム委員会	※ 四釜 正明 4A 委員長	※ 根本 昭彦 4A 委員長					
※ 石戸 誠之 2M 会計局長	※ 松本 洋平 2S 企画編集局長	※ 加藤 歩 3A 委員長	※ 今川 典博 4A 副委員長	※ 宗像 正夫 4S 会長					
※ 水野 谷 明男 2M 企画編集局長	※ 吉田 純 2M 庶務局長	※ 梁瀬 達也 2A 編集局長	※ 小林 巧 4A 副委員長	※ 三浦 公也 4S 副会長					
				※ 戸田 健太 4M 委員長					

※は、今回の座談会に出席した方です。

学生達を中心に、ISO14001の環境マネジメント活動が一段と活発化。今まさに、より具体的で主体的な行動が全学的に行われています。ISO年度2年目のN.I.T.の取り組みと、その成果を報告します。

ECOLOGY REPORT ISO年度-2 環境報告 平成13年10月～平成14年9月 初年度を上回る成果を上げた、N.I.T.環境マネジメントシステム

ISO年度-2のスタート当初に、部門の枠を超えて全学的な取り組みがしやすくなるように環境教育検討部会を設置しました。これによりこの1年間は、教職員、学生、それに学内関連業者が一体となって努力を重ね、その結果、エネルギーや資源の節約、廃棄物の削減などに、初年度を上回る成果をあげることができ、グリーン調達も進みました。

下記の図が示すように、キャンパス人口

の増加にもかかわらず、キャンパス全体の総消費エネルギーが減少。また、コピー用紙の経費削減、サービスセンター部門におけるエコ商品コーナーの設置、グリーン調達集計システム(POS)の稼働などにより、グリーン調達の成果も上がっています。さらに、本学が目指す環境教育においては、環境関連の科目が多く受講生を集めて実施されています。環境に関する特別講演を地域に開放して行ったり、学生と教職員が

共同しての環境研究もスタートしています。特にこの1年間の活動で強調したいのは、学生環境推進委員会を中心に熱心にEMSの学習を重ねて学生自ら「環境マネジメントシステム」を構築し、積極的に実践していることです。これは、本学の環境推進活動の最大の特色であり、誇りでもあります。次年度は、さらに強力な全学的スクラムを組み、教育・研究環境の改善に一層の努力をしたいと思います。

後援会の全面的支援による、「樹木のラベリング計画」実施が決定
緑化の推進・整備事業では、キャンパス全域の樹木の調査や樹木解説板の設置、樹木マップ製作などの計画を立案。後援会の全面的な協力により、ISO年度-3からその計画の実施が決定しました。樹木の樹名、学名、科名を調査し、それをデータ化することで、樹木の管理など、今後の緑化の推進・整備に役立てようというものです。また、樹木の説明をした解説板や樹木マップで、緑化への意識向上を促します。

LECTURE MEETING

環境特別講演 スウェーデンの環境政策と産業の動向

イェテボリ大学準教授 Dr. サン・チュール・パーク
平成14年10月18日 於：学生会館

環境保全と経済の持続的発展。その課題に早くから取り組み、世界のトップランナーとして知られる「スウェーデン」の環境政策と産業の動向についてご紹介いただきました。講演は英語で行われ、竹内彦彦日本工業大学教授が同時通訳をしながら進行。日本の環境共生と産業の持続的な発展を考える上でも大変示唆に富む内容でした。下記はその抜粋です。



明確化されている、国と地方の役割分担
環境を巡るグローバルな議論は1980年代におこり、80年代後半から活発化しました。その焦点は環境保全と経済の持続的発展でありました。スウェーデンは早くからその課題に取り組んでおり、世界のトップランナーとして認識されています。人口約885万人のスウェーデンにおける環境政策は、国と地方との役割分担が明確にされています。国はもっぱら対外的な対応と環境に対する指針を示し、実施レベルでは21の州と289の市町村の地方に多くの権限を与えています。南北に細長い国であるため、北部と南部では気候や地形など地域条件が異なり、環境政策もそれに対応して実施されなければならず、地方への権限分散が有効かつ不可欠です。

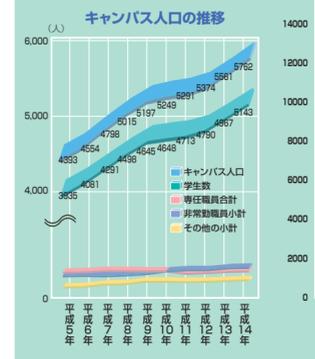
EUの指導的立場で、一つのモデルを示す国

EUではEU(欧州連合)が拡大するなかで、環境に対する対応は各国対応から欧州規模で対応するようになりました。時には広域的な決定が各国の規制値を上回ることもあり、「そのなかでスウェーデンは指導的立場にあり、一つのモデルを示している国です。厳しい環境規制とその実践例、ローカルとグローバルなレベルでの政策的対応の必要性などEUの基準ともなっています。

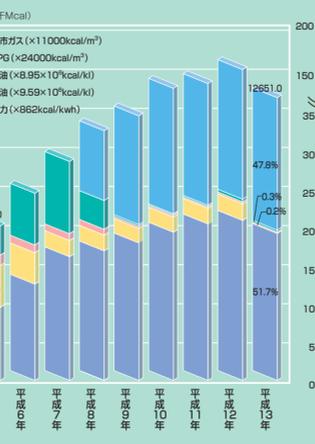
Dr.Sang-Chul Park

韓国生まれ。ドイツのギーズン大学とスウェーデンのイェテボリ大学で博士号取得。その後、日本工業大学に2年間特別研究員として滞在し、竹内彦彦教授のもとで工業システムの研究に従事する。スウェーデン帰国後、イェテボリ大学の準教授に就任。「持続的発展と先端型工業」の第一線研究者として国際的にも知られる。「Technopolis in Japan」など著書多数。

キャンパス全体の総消費エネルギー削減は、目標をはるかにクリアする実績を達成



キャンパス全体の総消費エネルギーの推移(cal換算値)



4つの研究テーマに、環境分野研究奨励助成金を支給

今年度から、「環境分野研究奨励助成」の事業が始まりました。この「環境分野研究奨励助成」とは、ISO14001認証取得で環境問題に積極的に取り組む大学の掲げる環境方針に父母の会社である後援会が賛同し、環境

システム工学系部門では、「チラー」で上水の削減に成功

システム工学系部門では、実験装置に大量の冷却水を使用するため、冷却水循環装置(チラー)を9台設置しました。これにより、当部門の上水使用量の算出基準が正確ではなかったために目標値をクリアすることはできませんでしたが、少なく見積もっても毎月400トンの上水の削減に成功。大学全体の上下削減には大いに貢献できました。

テーマ	自然力を利用した水質改善
代表者	船橋 昭一 共通系教授
期間	平成14年8月1日～平成15年3月31日
概要	過去の建築棟のエネルギー消費データの解析や、講義室の温熱環境の実測などを行い、消費量と外気温度の相関などを明らかにする。効果的な省エネ対策や快適性の向上に基づく天井の設置などの改善案を提出。

テーマ	建築棟のエネルギー消費構造の解析並びに講義室の温熱環境実測と改善案への提案
代表者	成田 健一 建築学科教授
期間	平成14年9月1日～平成15年8月31日
概要	過去の建築棟のエネルギー消費データの解析や、講義室の温熱環境の実測などを行い、消費量と外気温度の相関などを明らかにする。効果的な省エネ対策や快適性の向上に基づく天井の設置などの改善案を提出。

テーマ	卒業研究題目の大気環境への環境保全効果
代表者	原 利次 システム工学系教授
期間	平成14年8月1日～平成15年2月28日
概要	コンクリートや石膏ボードやプラスチックから排出される食品廃棄物と学内の食堂の廃油から製造したバイオガスやバイオディーゼル油を使って、中古車やバイクのエンジンを動かす、問題点や改良方法を探索。

テーマ	食品廃棄物から製造したバイオ燃料で走行するエコカー・エコバイクの開発
代表者	佐藤 茂夫 機械工学助教授
期間	平成14年10月1日～平成15年9月30日
概要	コンクリートや石膏ボードやプラスチックから排出される食品廃棄物と学内の食堂の廃油から製造したバイオガスやバイオディーゼル油を使って、中古車やバイクのエンジンを動かす、問題点や改良方法を探索。

機械工学系部門の廃棄物処理に「切り屑圧縮機」が活躍

機械工学系部門で排出される産業廃棄物のうち、量的に大きなウエイトを占めるのは切り屑と金属屑材です。このうち、切り屑については、機械工作センターに「切り屑圧縮機」が設置され、切り屑を塊状にして容積を著しく小さくすることができるようになりました。また、付着した切り屑油もかなり分離させられます。このため、切り屑廃棄所に長時間保管することができるようになり、廃棄物処理業者への依頼回数が大幅に減りました。



「切り屑圧縮機」が活躍

機械工学系部門で排出される産業廃棄物のうち、量的に大きなウエイトを占めるのは切り屑と金属屑材です。このうち、切り屑については、機械工作センターに「切り屑圧縮機」が設置され、切り屑を塊状にして容積を著しく小さくすることができるようになりました。また、付着した切り屑油もかなり分離させられます。このため、切り屑廃棄所に長時間保管することができるようになり、廃棄物処理業者への依頼回数が大幅に減りました。